

# 読解のための方略

野村夏治

## Comprehension Strategies in Reading

Natsuji NOMURA

### 1 文法とコミュニケーション

コミュニケーション能力を構成するものは、大きく3つに分けることができる。linguistic competence (言語能力), discourse competence (文の関連性を理解する能力), social competence (言語の社会的側面に関する知識・社会一般に関する知識と判断力等)である。

従来の教科書は文型・文法中心であって、その提示順序に従ったいわゆる言語能力中心の組み立てであり、それを活かすためにどのような場合や状況を設定するかが初歩の段階の教材構成の最大問題であった。現在もなお最大の問題であると言えよう。

言語材料の構成を示すものがシラバス (syllabus) であるが、現在ではコミュニケーション能力 (communication competence) 中心に組み立てられたシラバスが、衆知のように、W. Wilkins が開発したノーションナル・シラバス (notional syllabus) である。

彼の概念シラバスは3つの大きな範疇から成り立つ<sup>1)</sup>。 1 意味と文法を形成するもの 2 叙述の妥当性、可能性、必然性などを表すもの 3 コミュニケーションのための機能を表すもの——伝達機能 [判断, 評価, 説得, 質問, 反応, 同情など] である。このうち、1は、時間 (now, before など), 頻度, 位置 (at, in など), 動作主と叙述など, 文法構成と意味の関係を示す。2は、「法的意味」と言って、文の内容に対する話し手の心的態度を表し、動詞 (think, believe, expect, suppose など) や、法助動詞 (may, must など), 法副詞 (certainly, probably, possibly など) が用いられる。

英語では、判断や説得などの伝達をする場合、(1)の例文のように、話し手の表明したい意志を先に出すという特徴を持ち、特に否定の not を使う場合には「not のせり出し」現象が行われ、普通は(2)のように言わない。この現象は主節の動詞が上述の think などのときだけに起こる。これに対し、日本語では発話の終わりにならなければ話し手が賛成なのか反対なのかが分からない。これは、日英語の発想の違いを示している。

(1) I don't think it will rain.

(2) I think it will not rain.

英語(1)の文構造は comment clauses<sup>2)</sup>と呼ばれる。この not のせり出しは、意図や願望を表す動詞群 (want, wish, intend など) のほか、「らしさ」を示すもの (seem, appear, be likely など) においても行われる。

従来の文法では、とかく文法範疇が伝達範疇と同じものであるとみなされていて、命令は命

令形で、疑問は疑問文で表すと教えられているが、実際の言葉の運用はこのような単純なものではない。場面に応じて命令や依頼の表現が異なるのは言うまでもない。話し手の伝えたい内容を整理し、話し手の心情や感情までも伝えることができる言語材料の提示が望まれる。

コミュニケーション活動には「協調の原理」が働くが、もともとコミュニケーションの目的行動の基本的構造は、課題と解決のペア（隣接のペア<sup>3)</sup>と言う）から成り立つ。問いと答え、申し出と受諾、命令と対応などがあり、これにイントネーションが付随している。衆知のように、上昇調は未完、下降調は完了のニュアンスをもっている。yes-no 疑問文は情報を求めているから上昇調、wh- 疑問文が下降調なのはすでにかなりの情報がその疑問文に含まれているから当てはまるものだけを示せばよい、という理由からである。命令文は下降調であるが、丁寧な表現や頼むようなニュアンスを含む場合は上昇調となる。

学習活動としてのコミュニケーション活動の場面では、学習者は、学習している事項だけでなく、さまざまな言語材料を聞くことが大切であり、人と多く接して経験を深める必要がある。前者は exposure, 後者は interaction と言われる。一般の授業の展開では、「教師－教材－生徒」の相互の交流作用がひんぱんに行われるのが望ましく、少しずつレベルを上げたインターアクションを深めていくのがよい。

「あなたはだれですか」と尋ねたとすると、10歳以下の子どもなら、「私は〇〇です。お父さんとお母さんがいます。友だちがたくさんいます。〇〇が好きです。」のように、具体的事実が羅列される、とある教育心理学の本に出ているが、この段階が過ぎて内向的になっていく青少年に対する、もっと高度の英語のコミュニケーションの指導においては、学生の性格と感情の構造を把握し、彼らの心の琴線にふれることが必要となってくる。

## 2 文認知の方略

速読と精読の違いはあるが、読むからには正確に読まなくてはならないのは当然であって、読むには文法的配慮は欠かせない。外国語は文法を無視して読めるものではないからである。

日本語の構造と英語の構造の違いについては多く論じられているので、ここでは、その代表的な違いとして語順、修飾の形態（関係詞、埋め込み構造、右枝分かれ構造など）を取り上げ、それに関する文の認知について考えてみよう。

英語の語順を示す標準文型は、「動詞に先立つ名詞は動作主で、動詞に続く名詞は動詞が示す行為を受けるものである」。[NVN] 聞き手は特別の標識が示されない場合この文型を予期する。日本語ではふつう語句の切れ目が明白に示されない。（分かち書きは切れ目を明示するためのものである。）ところが、英語では、名詞句 [NP] は冠詞など決定詞と呼ばれるものによって切れ目が示され、節では、接続詞など補文子と呼ばれるものが単位境界表示の役割を果たして、関係代名詞もその中に含まれる。

G. D. プリドウと W. J. ベーカー (1982) は、ベバー (1970) とスロビン (1973) を集約し、次の4つの文認知方略を提案している<sup>4)</sup>。

1 終結方略 (closure strategy) —— 聞き手は句や節の終わりが早く来ることを期待する。

(3) The thief who stole the briefcase saw the man.

(4) The man saw the thief who stole the briefcase.

(3)では、関係詞節が文中に埋め込まれていて、語順の規則性を破ることで機能的な意味を表している（日本人の学生にとっては学習困難となる）が、SVOの完結が遅くなるので(4)の文と比べて認知的にむずかしい、と考えられる。(4)の修飾語句は右枝分かれ構造である。

## 2 標準形 (Normal Form)

主格及び目的格の関係代名詞が, NVN (SVO) の S, O のどれを修飾するかによって, 次の4つの文が考えられる.

- (5) The dog that bit the cat kicked the cow.
- (6) The dog that the cat bit kicked the cow.
- (7) The dog bit the cat that kicked the cow.
- (8) The dog bit the cat that the cow kicked.

この4文において, 「終結方略」からは(7)と(8)のタイプが易しく, 「標準形」からは(5)と(6)のタイプが易しいということになる. ところが, A. シェルダン (1974) の実験では(5)と(8)のタイプが他のタイプより易しいという結果が出ている, とする. プリドゥは, 3~4歳児では(8)(5)(6)の順に難度が高まり, 5~5.5歳児では(5)(8)(6)の順に難しいという年齢差がみられる, とする. つまり, (7)が一番易しいということになる. 私には, (7)が一番易しく, (6)が一番難しいのではないかと思われる.

## 3 非あいまい性 (Non-Ambiguity)

- (9) Sam brought Susie a flower. [第4文型]
- (10) Sam called Susie a taxi. [第4文型…スージーにタクシーを呼んでやった],  
[第5文型…サムはスージーをタクシーと呼んだ]
- (11) Sam called Susie a dummy. [第5文型…スージーをばかと呼んだ], [第4文型…スージーにばかを呼んだ]

3文を比較すると, 構造的にあいまいな(10)(11)よりもそうでない(9)が心理的な処理が易しいことは明らかである. 例えば, (10)と(11)では文脈を考えて文意が確認されるのがあるが, それにはその文が第何文型であるかということが判断のもととなる. このように, 意味があいまいな文の理解には五文型の知識が有効となる.

## 4 文法標識明示 (Bracketing)

関係代名詞は単位境界表示の役割を果たしているから, 関係代名詞が省略されている文より省略されていない文の方が理解されやすい. このように, 認知において速さ, 正確さの処理をしやすくすることを Bracketing とする.

- (12) The horse raced past the barn fell.
- (13) The guest expected to be late arrived.

この2文には, raced, expected という過去分詞が用いられていて, 構造関係を明示する関係代名詞が欠落しているため, 聞き手は, fell, arrived という動詞のところまで来て, 動作主の修飾構造関係がやっとならえらる. この2文は理解困難である.

ところで, 五文型ではうまく処理できない文が存在する. 例えば, 次の(14)のような location (場所) を表す副詞語句 (adverbial) の文は普通第一文型とされるが, この副詞語句を4要素でないからといって省略することはできない. 'be' は coupla と呼ばれる.

- (14) I have been in the garden. [SVA] (A は Adverbial)
- (15) You must put all the things upstairs. [SVOA]
- (16) (a) They kept him very quiet. [SVOC]
- (b) They kept him in bed.<sup>5)</sup> [SVOA]

この例はクワーク博士らの文法書からの引用であるが, 同書では, clauses types として七文型 (SV, SVO, SVC, SVA, SVOO, SVOC, SVOA) が示されている. 例えば, (15)の文は upstairs

という「場所」を示す語を省くと非文となってしまう。したがって、五文型でなくて七文型を設定した方が文の理解という点から適切であると考えられる。

A. S. Hornby は *OALD* では verb patterns を25設定している<sup>6)</sup>。

(17) Please put these papers on that desk. [VP15A] (S+vt+DO+adverbial phrase)

(18) Take your shoes off. [VP15B] (S+vt+DO+adverbial particle)

(19) She gave away all her old clothes. [VP15B] (S+vt+adverbial particle+DO)

ホーンビーは、*A Guide to Patterns and Usage* で示した verb patterns をかなり修正しているが、上例の adverbial particle (副詞不変化詞) を含めた文型を頭初から導入して、副詞語句を目的語や補語と同じく不可欠の要素であると考えていたことは明白である。

他の類例を挙げてみよう。次の(20)に対し、\*The child lay. は非文である。

(20) The child lay in the hammock.

文を読み聞きするとき、当初予測した構文分析の筋道が終わり近くに覆ってしまうことがある<sup>7)</sup>。

(21) Have the students who missed the exam take the exam today.

(22) Have the students who missed the exam taken the exam today?

2文とも途中まで全く同じ語が並んでいるが、(21)では原形 take が現われた段階でこれは使役の意味の命令文で、「試験に失敗した学生に今日試験を受けさせなさい」という意味であることが分かる。(22)では過去分詞 taken が出た段階で現在完了と分かり、「試験に失敗した学生は今日試験を受けましたか」という意味になる。Have が文頭に來ているので、(22)のように疑問文と推測するのが自然である。(21)は、途中から推測の修正を余儀なくされる文で、分かりにくい文である。このような文は「袋小路文」(garden path sentence) と呼ばれる。

Clark & Clark は2つ以上の意味解釈、あるいは読みをもつ「あいまいさ」について述べている<sup>8)</sup>。文を読み進むとき、あいまいな構文に出会ってもひとつの読みしか考えないのがふつうであり、(12)の文例では、「全速力で走るよう駆りたてられている馬」という読みより、まず、「馬が疾走している」という読みを取り入れた方があいまいさを速く取り除ける、と言う。

クラークの意見から考えられるのは、文の構造がたとえ正確に把握できない場合にも、構成語彙が理解できれば全体の内容がある程度までは理解することが可能であるということである。重要な語句や文が理解できれば、程度の差は当然あるが、コミュニケーションに支障がない、といえるかもしれない。

ここで、学生にとって識別困難である強調構文を取り上げる。‘it is XP that B’の形式でXPに現れる要素を強調する構文を分裂文(cleft sentence) [Jespersen, 1937] とする。

(23) It was this book that John read.

分裂文(23)は、that 節が表す John read X という情報を前提とし、X=this book という新情報を加える機能を持つ。前提とは、聴者が知っていると話者がみなす情報を言う。そして、新情報を担うXPの部分焦点(focus)と呼ぶ<sup>9)</sup>。

強調構文には、‘what S is XP’の形式を持ち、XPを強調する構文もあり、疑似分裂文(pseudo-cleft sentence) と呼ばれる。疑似分裂文は、what Sの部分前提とし、焦点XPによって新情報を加える機能を持つ。

(24) What John read was this book.

英語の談話構造においては、旧情報は文頭に現れやすいので、wh-分裂文(疑似分裂文)の方がit-分裂文より理解しやすいと考えられる。Hornby (1971) は、子供の両方の分裂文を

聞かせた実験結果から、このことが言える<sup>10)</sup>、と言う。

学生は、強調構文と形式主語 *it* で始まる *that* 節の区別ができないことが多い。虚辞 (*expletive*) の *it* で始まる(25) (a)のような文を *it* 外置構文と呼ぶが、(a)は(b)の構造から主語節を文末に移動し、主語の位置に *it* を挿入することによって派生される<sup>11)</sup>。このような、主語節、主語の動名詞句などが長く重い場合には外置されるのが普通で、これを「文末重心の原理」(*end-weight principle*) (Quirk *et al.* 1972) と呼ばれる<sup>12)</sup>。(a)と(b)の間には、文体上の違いは認められても、文法上の差はみられない。

(25) (a) It is obvious to all that Bill knows German thoroughly.

(b) That Bill knows German thoroughly is obvious to all.

### 3 「文と文」の読解方略

文を読み進むとき、学生は *it* が文中のどの語句を指すのかが分からないことがよくある。*it* は指示語であって、先行する文脈を受けて「前方指示」(*anaphora*) であるか、後に続く文脈を受けて「後方指示」(*cataphora*) かである。英語では、人を表す名詞が後続の文の中で再び出て来る場合、代名詞でなくて他の名詞に置き換えられることが多々あるが、学生はこの2語が同一の者を指し示すことが分からない。動詞についても同様である。つまり、語句レベルの操作が行われていて、代名詞で置きかえる、同義語を使う、用語を簡略化する、語句を言い換える、省略 (*ellipsis*) をする<sup>13)</sup>などである。これらは2文間の関係について推論するために利用できる手掛かりのひとつであり、*cohesion* (意味的連結) と呼ばれる。

ところで、英語では、2文間の関係を示すつながりが省かれることが多い。次はその例である。

(26) Betty walked into a room. The chandeliers burned brightly.

第2文の *The chandeliers* まで進んだとき、聞き手なり読み手は何のシャンデリアであるかを決定しなければならないが、適切な先行語句を記憶内に直接発見することはできない。しかし間接的な先行語句を推論して補うことはできる。第1文に、*The room had chandeliers* を加えると、2文の関係は明白となる。この推論過程を Clark and Haviland (1975) は「橋渡し」(*bridging*) と名付けた<sup>14)</sup>。

これは類推読みと言われる。文脈や同意語、反意語、言い換えなどを手掛かりとして読むことであり、類推読みによって分からなかった語句や文の意味が分かってくることがある。類推読みができることは読解力を高める重要なポイントである。

毛利は、日英語発想調整のための「読み方」のひとつとして、「入れ読み」の効果について述べている。これは文と文との間のつながりに何かの語を補う訳し方である<sup>15)</sup>。

(27) You needn't worry any longer: the devil is gone. (もう心配しなくてもよい、悪魔はもういなくなったのだから)

(28) It's no use to try to persuade me. You lose your breath. (わたしを言いまかそうとしても無駄だ。そんなことでは、ただ息が切れるだけだよ)

毛利は、読解力養成のために日頃実践している読み方として、「とぼし読み」、「入れ読み」、「カッコ読み」、「展開読み」、「転換読み」の5つをあげている。「転換読み」のひとつとして「品詞転換」をあげ、例として「大きさ」の概念を表すのに英語では *This is just as big as that.* と形容詞で表しうるが、日本語では「大きさが同じ」と名詞になる。もし「同じように大きい」と形容詞を用いると意味が異なる<sup>16)</sup>、と述べている。中村保男も『翻訳の秘訣 理論と実践』(新潮社、1982)の中で「品詞の転換」などについて詳しく述べている。

学習者が新しい言語材料の文を理解するという事は、新情報と旧情報との統合化がなされることであるが、新たに提示された情報は次の3つの段階を経て、知識構造の中へ関係づけられ、理解されていくと言える。まず第1段階は、何が既知で何が新であるかの分析であり、第2段階は、既知情報に一致する先行情報を探索することであり、第3段階は、その先行情報に新情報を結びつけて統合化をはかることである。

ところで、われわれは、いつでも有効な先行情報を見つけだすことができるわけではない。その場合、情報の統合化のため、例えば、次の3つの手続き<sup>17)</sup>を利用することが考えられる。

1 橋渡し 2 付加 (addition) [仮説的に新しい視点を加える——予測読みとか創造的読み] 3 再構造化 (restructuring) [既知情報と新情報を再構成する]。

高梨・高橋はその「言語能力と読解能力」の研究<sup>18)</sup>において、ア 接辞の意味 イ 文脈における語の意味 (詳述, 対照, 肯定, 付加, 理由) ウ 統語的意味 (時制, 相, 法, 仮定) エ つながり (cohesion) の意味 (指示, 省略, 代入, 同義性, 反復, 上下関係)

オ 文と文の意味関係 (1 Matching [前の文の内容の具体例と詳述] 2 Contrast [修正, 対照, 言い換え] 3 Logical sequence [前の文の内容の原因, 結果, 結論]) の5項目を示している。

このうち、イの能力が一般読解力との相関がきわめて高い。エの能力もきわめて相関が高いが、上下関係 (hyponym) [cars, taxis, buses—vehicles] 及び後方照応に対する理解度が低いという結果になっている。オの2の能力も高い相関があり、ウの能力は低い。なお、このオの3には「原因, 理由」に「目的」を加えることができよう。

読解とは、語句、統語上の諸問題、文の構成についてその意味を文脈上の意味 (contextual meaning) に密接に結びつけて、文全体の意味を正確に把握することであろう。学習活動は、当然のことであるが、類推と分析、帰納と演繹の絶えざる相互活動でなければならない。

#### 4 パラグラフ・段落

長文の読解活動について述べる前に、英語と日本語におけるパラグラフないし段落についての考え方について整理しておこう。

著者が、ある主題を中心にして彼が伝達を意図している思想を言語という表現手段を用いてエッセイを書くとする。彼は一語一語を積み上げて文を作るとともに統語上の規則を守り、意味的連結について考慮をしながらいくつかの文を積み上げる。文章のなかで、形や意味の上でひとまとまりになっている部分が段落である。その段落がいくつか集まって、首尾一貫した内容をもつものが文章である。全体を構築する部分としての英語のパラグラフないし段落は、レンガがきちんと積み上げられたものに似ていて、全体として堅固な建造物が構築される。

これに対し、日本語の文章は柔構造であって、トウフにたとえる人もあるが、その他の特徴としては表現をあいまいにし余韻を残しておくのを好む傾向がある。日本語は場面依存、点的論理の特徴をもっている上に、句読点の任意性から予想されることのひとつにパラグラフの感覚の欠如がある。「日本の作家で、志賀直哉以前の作家たちはほとんど段落をたてる頭がなく、でたらめに文章の行をかえております。」(西尾実)<sup>19)</sup>

外山は「文章構成の原理」について述べたあと、「思考の組み立て」について次のように言っている<sup>20)</sup>。

日本人は言語で考えをまとめる場合に、何を単位にしているのでしょうか。ただちにこれ

に答え得るのは容易ではあるまい。たいていの人がはっきりした意識をもっていないからである。センテンスを単位と感じている人がかなりあると思われるが、語とか句とかを単位だと考えている人もあるにちがいない。ヨーロッパの人たちが筋道のはっきりした文章を書くときにはほとんど例外なしにパラグラフを単位にしているのと対照的である。

ある英語の学生が日本語を英訳しているとき日本語のわかるアメリカ人の指導を受けたが、その日本人学生が原文の一つのパラグラフを英文では三つのパラグラフにして訳したのを見て、アメリカ人はひどくおどろいて、どうして原文の一つのパラグラフを訳文でも一つのパラグラフにしないのかとくどいほど問いただした。学生はなぜそんなことを言われるのかわからなかったにちがいない。これはパラグラフに対する感覚がないからである。……

センテンスを単位とした文章ではいわゆる論理のはいりこむ余地は少ししかないが、パラグラフになると、論理の展開が重要な問題になってくる。さきの学生のようにセンテンス中心に文章を考えていると、文をこえる論理は見失われてしまうことになりやすい。

日本人の発想の特色はユニットがはっきりしないで、しかも、ヨーロッパ人より概して小さなユニットを無意識に用いることにある。このことは世界に比を見ないような短詩型文学の豊かな発達を見せていることと無関係とは言えないかもしれない。……箱庭にころがっている小石を集めても大きな建造物をつくることはできない。

以上述べたことを改めて整理しなおすと、段落とは、ひとつの中心的な主題を展開させる論理的なまとまりをもつ発想と表現の単位である。この中心的な主題は先行する段落のなかのひとつの主題文の表明されているものを受け継ぎ、その段落のなかで展開されている思想を新たな主題文のなかに要約して、後続する段落へと引き渡していく。このようにして、堅固な全体・文章が構成される。

言語の研究は、現在、言語学の領域だけでなく心理学の領域においてもなされていることは衆知のとおりである。理論言語学においては、その一端が、構文論や意味論だけでなく、最近ではコミュニケーションを中心とした語用論 (pragmatics) を取り扱っていて、認知心理学においては、文章の理解における読み手の積極的な意味づけの問題が議論されるようになっている。このように、現今言語をコミュニケーションのなかでの意味という観点からとらえようとする傾向がみられるが、これは、認知科学の言語に与えたインパクトのひとつであると考えられる。

ここで、話し手ないし聞き手がコミュニケーションを行うに当たって無意識にあるいは意識的に取っている立場について考えてみよう。発話の立場について、山梨<sup>21)</sup>は文脈という語を用い、文脈の主なタイプとして次の4つをあげている。

- 1 言語的文脈：言語的脈絡としての前後関係、問題の言語表現ないしは発話の前後関係の特徴づける言語的な要因
- 2 状況・場面的文脈：具体的な発話の場面や状況にかかわる外部世界の物理的、即物的な要因
- 3 社会的文脈：問題の発話にかかわる話し手、聞き手や第3者の対人関係、相互の役割関係を特徴づける要因
- 4 心理的文脈：発話の参加者が一般的ないしは恒常的に信じる信念（ないしは信条）の体系を規定する要因

## 5 スキーマ理論

スキーマ (schema) とは、あらゆる過去の知識 (prior knowledge) を構造化して表したものであり、記憶のなかに貯えられている総称的概念 (generic concepts) を表現するためのデータ機構である。(Rumelhart, 1980) スキーマ理論はもともと認知心理学の用語で、基本的に知識についての理論である。Rumelhart によると、人のあらゆる知識 (経験を含む) は単位化されて記憶のなかにしまいこまれている。これらの知識の単位がスキーマと呼ばれ、人は卒業式という言葉に接すると、一連のパターン化された卒業式の知識が呼び出される。

スキーマの活動の仕方にはトップダウンとボトムアップがある。例えば<sup>22)</sup>、感謝祭と言うと、パーティ、食卓、パンプキンパイ、というように大きなスキーマ (抽象的スキーマ) から小さなスキーマ (具体的スキーマ) を引き出す方法がトップダウンである。これと反対に、下位区分の具体的スキーマからより大きなスキーマを引き出すのがボトムアップである。しかし、この両者はそれぞれ別個に行われるというより、ほぼ同時に互いに補足し合う関係にある、と考える方が实际的であろう。

Kenneth S. Goodman は心理言語学の立場から、読みの受容過程 (receptive language process) は、言語の余剰性 (redundancy) と言語的制約 (linguistic constraints) の知識に基づく次の4段階の手続きによる読みの活動の循環を繰り返している、という仮説を立てている。

- (1) 見本を抽出する (sampling) : 文やパラグラフの中から目立つ語や表現を探す。キーワードはしばしば反復されていたり、イタリック体で印刷されていたり、' ' で囲まれていたりする。
- (2) 予測する (predicting) : 目立つ語句からその文またはパラグラフの内容を予測する。読み手がそのトピックについての知識を豊富にもっているほど、この予測は容易である。予測は文の構造についてもなされる。
- (3) テストする (testing) : 予測、すなわち仮説として設定したものが正しいかどうかをテストしながら進んでいく。
- (4) 確認する (confirming) : 予測したものが正しいことが確認されればそのまま先に進む。予測が違った場合には、もう一度最初に戻って仮説を立て直す。しかしあまり重要でないと判断する時は、一時保留にして、そのまま先に進むこともある<sup>23)</sup>。

このように、読解活動は極めて能動的な活動であって、単語の意味と文の構造が分かれば、文意はおのずと明らかになるというものではない。読み手がスキーマという知識を豊富にもっているほど予測は容易となる。パラグラフや文全体の意味を検証し判断するには、当然のことながら、場面や文脈に即した検証が実施されねばならず、絶えず confirming と disconfirming (誤りを証明する) が行なわなければならない。

文章を理解する場合、われわれは、文章に実際に表現されていることだけを利用するのではない。表現されていないことでも、必要があれば推論して、穴埋めをして文章を理解するのである。文に表現してあることだけを単に受動的に受容すれば、意味が分かるようになるというわけではない。つまり、読み手の方は、表現されていないことでも、積極的に創造して、文脈、場面などに応じて、意味が通ずるように努力するのである。このように、理解の過程とは、読み手の方で積極的に意味を構成していく過程である、ということができる。

人々が推論し、文章の意味を構成していくには予備知識が必要である。この知識はどのように表現されて記憶されているのであろうか。また、この知識はどのように利用されるのであろう



うか。この予備知識が上述のスキーマである、と考えることができる。

文章の理解がスキーマを利用してどのように進行するかについて、Rumelhart (1980) の例を引用しよう<sup>24)</sup>。なお、番号は便宜的にここで付したものである。

① Business had been slow since the oil crisis. ② Nobody seemed to want anything really elegant anymore. ③ Suddenly the door opened and a well-dressed man entered the showroom floor. ④ John put on his friendliest and most sincere expression and walked toward the man.

①は大前提で、景気の低迷がずっと続いている、ということが過去完了によって表されている。②へ進んでも、不景気のままである、ということが分かる。ところが、③になって状況の進展が見られる。身なりのよい金持ちの男がショールームに入って来る。ここまで来ると、このショールームは自動車のショールームであろうと推察できるようになる。④では、セールスマンのジョンが、まじめな、精一杯の愛想の表情を浮かべて、この来客へ近づいていく。

## 6 長文の読解力

羽鳥博愛は「読む力」を次のように定義している<sup>25)</sup>。

- (1) 速く読めなくては本当に読む力があるとは言えない。いちいち日本語に訳してみなければ英文の内容が分からないとか、主語はどれでそれを受ける動詞はどれ、この部分はこの名詞を修飾するなどと考えなくては、英文の内容が分からないのも読む力があるとは言えない。
- (2) 未知語は前後の文脈からその意味をある程度想像できなくては読む力があるとは言えない。
- (3) 常識、あるいは、過去の経験と文中に述べられていることとを結びつけて考える能力も、読む力にとって大切である。本当に読めるためには、文中に書かれていることと現実とが結びつけられなくてはだめで、それができたときはじめて本当に文の内容が分かった、つまり、読めたと言えるのである。

「文章理解における文脈の効果」<sup>26)</sup>という研究によると、我々が文章を理解するには何らかの文脈による手掛かりを利用して全体の意味を構成していくのだが、その手掛かりを、大別すると、外的文脈手掛かり（外側から与えられる情報解釈のための仮説や方向性を発見させる手掛かり）と、内的文脈手掛かり（外側からの手掛かりと協同して内側から仮説を発見させる知識や人格特性）に分類される。外的文脈はテキストを理解する手掛かりであるが、そのテキストに内在する論理を見いだすために種々の仮説の設定とその検証（演繹、帰納、発想〔仮説形成〕）を行い、ときには、事象間や文章間の欠落と飛躍を埋め、一貫したつながりを作らなければならない。我々は、個々ばらばらな情報を結合し、橋渡しをするための仮説を発見し、それらを検証しながら全体の要点構造を理解していくのである。内的文脈手掛かりはその人の持つ知識、経験、人格特性によって大きく異なる。その人特有の、テキストを見る視点と言える。

大下による「具体的読解ストラテジーの指導」<sup>27)</sup>には、予測読み〔Goodman〕、パラグラフ読み、とばし読み、類推読み、直解読み〔eye spanやmemory spanを広げる読み〕、もどき読み〔特に内容を正確にとらえる読みでは、論理の一貫性を確認したり、前の文脈を思い出したり、間違った予測を訂正する読み〕、教材や目的に応じた読み〔Grellet (1981) は skimming 〔概要

をとらえるためザッと読む], scanning [ある特定の情報を得るためザッと読む], 多読, 精読] を提唱している。

新しい「読み」の技術として伊藤元雄は読解の次の4つのレベルを挙げている<sup>28)</sup>。1  
Literal level comprehension 2 Interpretive level comprehension と、次の3と4である。

### 3 Critical level comprehension

- (1) 文中の人物の性格, 行動, 心の動きなどを知り, 批評したり, 評価したりする。
- (2) 書き手の思考傾向やねらいを確認する。
- (3) 読みとった情報に妥当性があるかどうかを分析し批判する。
- (4) 書き手の態度が主題について, 肯定的か否定的か, また, 想定された内容が十分に表現されているかどうかを見る。

### 4 Creative level comprehension

- (1) 読みとった情報や概念を記憶に保持する (retention)
- (2) 読みとった情報や概念を適用し, 読み手の過去の経験や知識を統合する。 (integration)
- (3) 読みとった内容に共鳴したり, 感動したりするなど, 情緒的に反応する。 (emotion)

## 7 翻訳上の諸問題

日本語と英語の関係を述べたある本<sup>29)</sup>によると, 日本人の書いた論文を読んで一番とまどうのは論理が飛躍することであると英語国民は嘆く, という。英語では, 関係代名詞の存在と品詞の配列原則と句読点用法から, 話の本筋からのずれも, またそれへの復帰も, 文の形からすぐ理解できる。ところが日本語では, 突然話が横道にとび, 本筋に戻ったかと思うといつのまにかまた横道にとんでいる。数文章を読み, よく考えてみないと著者の言おうとすることが理解できない, と彼らは言う, というのである。

この理由は, よく分からないが, 私には, 英語は論理構造が直線的であるのに対し日本語の論の進め方が起・承・転・結とまわりくどい印象を与えることと, もう一つには関係代名詞が存在しないためである, とされる。関係代名詞を含む文を翻訳するために先人は工夫を重ねて来たが, 修飾語句を長々と名詞の前に置いて修飾するという翻訳調の日本語文はまことにぎこちない印象を与えるのに, 我々英語教師はこの表現方法に馴れてしまい, 「私は昨日銀座の, うまいコーヒーをのませ, いい音楽を聞かせる喫茶店で, B君と会った」などと訳している。

翻訳について考えてみると, 無生物主語構文の翻訳「何が彼女をそうさせたか」が日本語に与えた衝撃は大きかったのであるが, そのぎこちない, 従来は日本語になかったこの新しい表現に対し我々はとまどいながらも新鮮さを感じ, やがて, この表現は日本語の中に取り入れられていった。これは外国語との接触から生まれた変化である。ローラン・バルトが「宇宙は限りなく意味づけに開放されていて, かつまた, 限りなくそれに満足しない」と言ったように, 国際化時代の現在, 言語がつくり出した宇宙は絶えず胎動していて, 例えば, 日本語と英語という言語圏内では, 言語の進化とでも言えるような運動が互いに刺激を受けて変化の過程をたどり, 互いに他国の言葉に影響を及ぼし, 元の言語の枠を突き破って, 人々の意識をも少しずつ変えているのである。文化と文化との間には, 二つの相反する運動, すなわち, その文化固有の独自の発展ないしは継承と, それに相反する他文化への接近と依存とが行われているのであって, 文化間の接触こそが翻訳という作業を可能にしているのである。そしてその二文化の質の差そのものが翻訳をきわめて困難にしているのである。

A. ヘミングウェイの *For Whom the Bell Tolls* 『誰がために鐘は鳴る』はなぜ『ベル』ではい

けないのか<sup>30)</sup>。その理由は、これが John Donne (1573-1631) の *Devotions X VII* の一節“*No man is an island.*”以下を引用したものだからである。ダンは「人はだれ一人として孤島ではない、人という大陸の不可欠の一部である。いかなる人の死も人類に連帯する自分の身をけずることになる。だから弔いの鐘を耳にするとき……」と人の連帯性について訴えているのである。ヘミングウェイは、主人公の胸中に、読者の胸中にこの鐘を鳴り響かせたのである。このように、英語国民には常識であることが往々にして我々の翻訳を困難にするのである。

注

- 1) 田辺洋二『学校英語』(筑摩書房, 1990) p. p. 68-71
- 2) R. Quirk, S. Greenbaum, G. Leech, J. Svartvik. *A Comprehensive Grammar of the English Language* (Longman, 1985) p. p. 1112-1118
- 3) M. A. K. ハリデー, R. ハッサン著, 笈壽雄訳『機能文法のすすめ』(大修館書店, 1991) p. 136
- 4) 林栄一, 小泉保『言語学の潮流』(勁草書房, 1988) p. p. 266-268
- 5) 前掲書2) p. p. 53, 55
- 6) A. S. Hornby. *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (Oxford Univ. Press, 開拓社, 1984) p. XXXV
- 7) 渕一博『認知科学への招待』(NHK, 1985) p. p. 172, 173
- 8) H. H. クラーク, E. V. クラーク, 堀口俊一監訳『言語と心理』(桐原書店, 1984) p. 105
- 9) 中村捷, 金子義明, 菊池朗『生成文法の基礎 原理とパラミターのアプローチ』(研究社出版, 1989) p. p. 189, 190
- 10) 福地肇『談話の構造』(『新英文法選書』)(大修館書店, 1985) p. 156
- 11) 前掲書9) p. 198
- 12) 安井稔『[例解] 現代英文法事典』(大修館書店, 1987) p. 383
- 13) 小正幸造『すぐれた英語翻訳への道』(大修館書店, 1989) p. 221
- 14) 大村彰道「文の理解と構成」坂元昂編『現代基礎心理学7 思考・知能・言語』(東京大学出版会, 1983) p. 142
- 15) 毛利可信『意味論から見た英文法』(大修館書店, 1980) p. 55
- 16) 同上 p. p. 53, 54
- 17) 山内光哉『記憶と思考の発達心理学』(金子書房, 1983) p. 230
- 18) 高梨庸雄, 高橋正夫『英語リーディング指導の基礎』(研究社出版, 1987) p. p. 207-209
- 19) 成瀬武史『翻訳の諸相 理論と実践』(開文社出版, 1978) p. 251
- 20) 外山滋比古『日本語の論理』(中央公論社, 1973) p. p. 47, 48
- 21) 山梨正明『比喩と理解』(認知科学選書17)(東京大学出版会, 1988) p. 40
- 22) 谷口賢一郎『英語のニューリーディング』(大修館書店, 1992) p. 17, 18
- 23) 土屋澄男『英語科教育法入門』(研究社出版, 1990) p. p. 96, 97
- 24) 前掲書14) p. 149 アメリカでの自動車販売は客が出掛けて行って買うのがふつう。
- 25) 羽鳥博愛「英語の学力とは何か」中島文雄監修『新英語教育論 講座 新しい英語教育I』(大修館書店, 1982) p. p. 136-138
- 26) 村石昭三『言語と教育』(教育学全集19)(第一法規, 1982) p. p. 184, 199
- 27) 大下邦幸「読む力をつける指導法」片山嘉雄, 遠藤栄一, 垣田直巳, 佐々木昭『新・英語科教育の研究』(大修館書店, 1988) p. p. 222-224
- 28) 伊藤元雄「新しい「読み」の指導——予測能力を高める——」『英語展望86 AUTUMN 1986』(ELEC, 1986) p. p. 8-10
- 29) 平野進『技術英文のすべて』(丸善KK, 1983) p. p. 32, 33
- 30) 前掲書19) p. 50